

感動と知る努力

1月31日に東京エレクトロンホール宮城(仙台市青葉区)で、新春恒例のいきいきSUNクラブ会員感謝祭「2013いきいきシニア初春の集い」が開催された。目玉の著名人講演会では、日本の古美術鑑定界の重鎮で、テレビ番組「開運! なんでも鑑定団」の鑑定士でもある中島誠之助さんが登場。歯切れのいい江戸っ子トークで約1時間半たっぷり楽しませてくれた。講演会前に控え室でお話を伺ったところ、気さくに応えてくれた。



profile

中島 誠之助 (なかじま・せいすけ) (75)

1938年東京生まれ。大学卒業後に遠洋マグロ漁船に乗り込み、海外を旅した後、60年から古美術商として鑑定に従事。76年、南青山に骨董品店「からくさ」を開き、古伊万里の魅力を世に広める。テレビ番組「開運! なんでも鑑定団」では94年の放映当初から鑑定士を務め、骨董ファンのみならずお茶の間の人気者に。「いい仕事してますね」のセリフで、96年にはゆうもあ大賞を受賞した。「骨董掘り出し人生」(朝日文庫)など著書多数。

真の値打ちは分かりにくいもの

東北地方へは温泉が好きでよく足を運びます。どの温泉を訪ねるか、宮城ならここ、山形ならここというように、東北各県で決まっていますよ。食べ物もね。どこかは内緒だけれど。

私たちにとっては「東北」という言葉自体が魅力。昔、ヨーロッパ人が日本を「ジパング」と呼んで憧れたように、上方の人々は東北や陸奥という言葉に、はるかな地への憧れを抱いてきた。平安時代の貴族も同じで、和歌に詠み込まれた「名取川」など、その言葉の響きにはそくりとエキゾチックなものがあります。

目に見えない厚み

東北は、私にとっていまだに未知の場所。

講演会では、中島さん流の鑑定哲学やテレビでの鑑定エピソードなどを語った



図らずも、東日本大震災で、私を含めようやく日本人の中の人々は東北の地図を理解したのではないのでしょうか。あれほど長いリアス式海岸があると知らなかったし、気仙沼がどこに位置するかも実はよく知らなかった。それは、八幡太郎義家や松尾芭蕉の時代から変わっていない。今もそう。

手紙を読むだけで

「開運! なんでも鑑定団」が始まって19年がたちますが、物を見る姿勢

人があまりものをしゃべらない謎の民族だから。食も文化も、何もかもが自給自足で満ち足りている。自分たちの中に幸せを包み込んでいる。歴史や文化、風土にどうしようもない「厚み」を持っている。

内面的な力

それは目に見えるものではないから、古美術品の見方と同じで、その奥を見て判断しなきゃいけない。しかし、東北は知れば知るほど分からないんです。むしろ謎であつた方がいい。今の時代の流れに、無理に歩調を合わせなくていいと思ってるんです。

手紙を読んだだけで分かることもあります。(鑑定品の) 故事来歴や置いてあった場所、買った値段などに耳をそばだてると、真実が見えてきます。

形や色といった見かけの美しさは、一見、金目のものに見えます。しかし、本当の値打ちは分かりにくいもの。さほど技工は見られないけれど、なぜかこの作品には吸い込まれる、もう一度見てみたいと思わせるのが、真のお宝なのです。

いい物を数多く見ていると、その物に託された内面的な力、つまり作者がどんな気持ちで物作りに打ち込んだのが、分かってくるものです。

見る目を養うには、ま

は変わりません。大切なものは、欲を捨てること。欲は目を曇らせる。虚心坦懐、山や海を見るように物を見ます。私はよく「偽物を作った売った方も悪いが、買ったあなたも悪い」と言うことがあります。買った方にも欲があるから。物を見る時は、もうけばかり考えず、素直な気持ちで。本物が、偽物かの鑑定は一瞬です。テレビでは(鑑定品を覆つ)布を取り外した瞬間に分かります。「実は収録前に見てるんですよ」って言われますけど(笑)、そんなことはありません。写真や手紙は事前に拝見しますけどね。

ず人間性を高め、感性を磨くことでしょうか。古美術品に限らず、風景や音楽など、幅広い分野でいい物に触れる。そして感動し、知るための努力をすることが大切です。

でもマニアックになつてはいけません。骨董(ごつごつ)ばかりに目が行つては、人間の幅が狭くなってしまつ。私は「捨て目をきかす」と言いますが、常に自分の中に空白の部分を持つておく。そして、失敗を経たお金の痛みを知るのも大事です。

あとは、過去にこだわらず、前進していくことが、美の発見につながるっていくんでしょうね。